

斐太北小 ESDだより

Education for Sustainable Development(持続可能な社会の創り手を育む教育)

弥生の火から未来へ—地域と世界を結ぶ学び

六年生は、9月12日(金)妙高の魅力を学ぶ校外学習に出かけました。

最初に訪れたのは妙高市小濁地区の廃校跡地です。土器づくりの先生村越さんと康子さんは、朝から火入れをして待っていてくださいました。自分たちが手づくりした**弥生式土器**を野焼きし、薪をくべる瞬間、子どもたちは2000年以上前の弥生時代に想いを馳せ、斐太地区からも出土する土器を作った先祖の営みをリアルに感じていました。この体験は、土器の焼き肌が薄黄色に次第に変化する様子を観るなど五感も刺激されました。



次に訪れたのは、**地元特産「かんずり」の工場**です。伝統の製法や発酵の知恵を学び、作り手の想い触れ、試食体験もしました。その中で「この秋に唐辛子を収穫し、雪さらしをして、自分たちの手で作ってみたい」という声生まれ実施することに。故郷を誇りに思う心が自然に行動力につながりました。



3年生の時に訪れた時と、6年生の今では、話を聞いて感じたことや考えたことが異なると気付いた子どもたち。ふるさとの学び直しは、今だからその価値があったようです。

三か所目は「**新井道の駅**」です。道の駅の利用者数、規模、観光や流通の工夫に触れました。子どもたちにとって身近な施設でありながら、新発見の情報が盛りだくさんでした。5年後にリニューアルするという情報を知り、「道の駅でこんなことをしたい」「あったらいいな〇〇」を、その場で考えて発表し合いました。

「この日の午後から市長を交えての開発会議が予定されているから、皆さんの意見を話題にしますよ。」とスタッフさんが投げかけると、子どもたちの想いを直接市政に届けるんだ!という勢いで楽しそうに夢を語っていました。





またランチは、道の駅のお店に入り、一人一人が自分でメニューを選び、注文して食べるという初めての挑戦をしました。これは修学旅行を見据えた実践であり、自立心と責任感を育てる学びの場となりました。注文しすぎたり、割り勘の計算で戸惑ったり、支払いで紙幣と小銭を別の財布に入れていたので、他の支払い待ちの方々を待たせて焦ったりと、ドキドキ体験でした。最後には、「すみませんでした。ありがとうございました。」をきちんと伝えていました。



最後に**ロッテアライリゾートホテル**を訪れ、世界から訪れる人々を迎える現場を見学しました。地域の自然や文化が世界とつながっていることを実感し、観光を通じて地域と世界が結びつく姿を学びました。安全面のシステム、日常を忘れてしまう贅沢な空間に「東京みたい…いや、外国にいるみたい」とつぶやく子もいました。



この一日を通して子どもたちは、**地域の歴史・文化・産業**に出会い、自分たちの生活や未来と結びつけて考えることができました。仲間と対話しながら学びを深める姿は、まさにESDの実践であり、斐太北型イェナプラン教育の「対話・共同・責任」を体現するものでした。地域に根ざしながら、世界につながる学びを進めています。11月の修学旅行で、今回学び直した故郷「斐太・妙高」についてまとめ、金沢市内のユネスコスクール認定小学校と交流する予定です。

紹介した学びの方向性において、この文章の表現の範疇を越える気づきや指向性をもった子どもがいますことを付け加えておきます。その子のその子らしい学びです。素敵ですね。体験して、やってみて、失敗したなあということもまた大切な学びです。「今度は〇〇したい」「将来◇◇したいなあ」と呟きが聞こえてきました。少し離れたところからその声が聞こえてきました。嬉しくてにんまりとした校長でした。

9月17日(水)3,4時間目に、**金沢市立明成小学校の6年生46名の皆さんとZoomで交流**をしました。自己紹介やお互いの故郷についての情報交換が大いに盛り上がりしました。

